

香川県高松市の沖合に浮かぶ大島。国立療養所大島青松園のある島に、田島征三の作品が展開しています。

<大島の作品を鑑賞するには>
瀬戸内国際芸術祭以外の年は、月に1日程度の公開日のみ鑑賞することができます。詳しくはART SETOUCHI のHPにて <https://setouchi-artfest.jp>



青空水族館 2013



2013年瀬戸内国際芸術祭、高松沖に浮かぶ大島でぼくは「青空水族館」を創った。「らい予防法」により、ハンセン病に罹患した人々を、まるで犯罪者のように収監し、閉じ込めた歴史の島に、一見、ちょっと楽しく想い廻らせると悲しみが籠められた水族館。

森の小径 2016～



ぼくは今、作庭の熱をたぎらせている。

敬愛する画家の熊谷守一さんがご自宅の庭に掘った池が、廻りの都会化により水脈が切られ空っぽになった。その池底に座って空を見上げている守一さんの姿がこの庭の発想の素になっている。守一さんの見上げる空には池まわりの木々の枝がはり出し、守一さんと空の間に広葉樹の葉が透き通ったり反射したりしてここちよく重なっている。植物は人の命の奥深くを揺すぶる力を持っているようにぼくは思っている。守一さんはアトリエに入る前の数時間、創作の熱を植物からもらっていたのかもしれない。

2016年、「水族館」と「Nさんの人生」の間には、長家はなく、廃材だけが積み上げられていた。6年の月日が、黒松、ウバメガシ、トベラ、ヤマモモ、シマトネリコを大きく背高く育てた。中にはイタブ(イヌビワ)やシャシャブ(グミの一種)が実をみのらせている。花を咲かせる植物も何種類か成長している。ぼくはこの場所に車椅子やストレッチャーで巡る「森の小径」という名の庭を創ろうとしている。

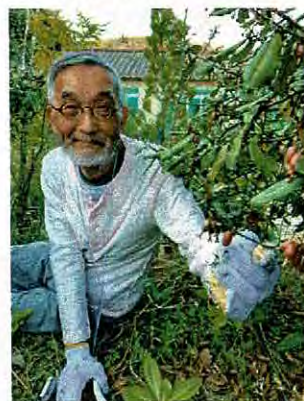


人生を傷つけられ、絶望の中に老いた身を横たえている入所者の方々の生きる力をかきたてるのが、植物にはできるのではないか?! ストレッチャーの上に横たわって、この森を巡れば植物が彼らに春や夏の話聞かせてくれるのではないか?! 病のために盲目になった方は多い。例え視覚が奪われていても、植物たちは彼らに秋や冬の物語をしてくれるに違いない。だからぼくの作庭は、空にのびた枝葉を重要視している。そして時間軸でそれらがどのような物語を話すか、空と小径の両側に伸びる植物をレイアウトしなければならない。

そこに突然ヤマツツジの淡いピンクの花が登場するとどんなに素晴らしいか！入所者の方々は、かつてこの島の山の中腹まで登って、そこにあずまやを建て、弁当や酒を友にヤマツツジを愛でていた。だが、今はそこまで登って行ける人はいない。ぼくはヤマツツジの移植を試みた。しかし島の人々に「ヤマツツジは下におろすと潮風に当たって枯れる、たとえ枯れなくても花は咲かない」と云われた。だが潮風に強い植物でまわりを囲んで三年目にはヤマツツジの花を咲かせることが出来た。しかし、まだ見上げるほどには成長していない。一方、実をつける木は増えてきた。植物の実りも人を勇気づけるのではないだろうか？

ぼくが作庭という未知のアート奥深くにわけ入ろうとしている理由は、国際的に活躍した彫刻家「若林奮」(1936～2003)から受け継いだと勝手に思い込んでいるからだ。若林は、ぼくたちが廃棄物処分場建設に反対するため闘っていた森に移動させることが不可能な作品を創った。《緑の森の一角獣座》この作品は、世界中のすぐれたアーティストが抗議をしたにもかかわらず当時の東京都知事石原慎太郎によって破壊された。その未完の作品には到底及ばないが、「森の小径」は、アート作品として完成させるつもりでいる。

かつて、木々がまだちょろりとしか生えてなかったこの庭を手入れしているぼくに、島に通う美容師のIさんが、「もう大勢の方々が遊びにみえてますよ!」と教えてくれた。この島で故郷に帰ることも許されず亡くなられた千数百以上の方々の魂がこの庭に来てくれているという。ぼくは霊的な事を信じるタイプの人間ではないが、そのように空想するのはある種の救いになったのだ。だが、ぼくは魂を慰めることよりも、今、生きて苦しんでいる方々の命をカづけたい。だから、ここは「魂の庭」ではなく「いのちの庭」と呼びたい。



赤い実をつけるグミの一種

Nさんの人生・大島70年 2019

2019年、ぼくは「青空水族館」を創った時のように、入所者の方たちがかつて暮らした五軒長家の廊下をつなげて五つの部屋にし、この島で70年生きてきたNさんの人生を作品にした。



編集手帳

『ちからたろう』『とべバツタ』など数々の名作絵本で知られる田島征三さんを評し、作家の灰谷健次郎さんがこう書いている。へー見どころ大きいけれど、どろくささの向こうにあるものが、ぼくたちの魂を根こそぎゆすってしまうような凄まじい迫力がある。この夏、瀬戸内海、高松沖の大島で展示中の新作にも同様の思いを抱く人が少なくならう。ハンセン病の元患者が、絶望的な日々を過ごした長屋丸々1棟を使った空間アートである◆田島さんが初めて島を訪れたのは10年ほど

前のことだ。強制収容され六十年を島で過ごす男性から悲痛な生涯を聞く。16歳で母と別れ島では強制労働、結婚した妻は中絶を強いられた…◆鮮やかな絵画や造形、文字で表現した記憶が、五つの部屋にひしめく。「ささえ合ってきたから生きてこれたんじゃ」。壁に綴られた妻への感謝の言葉に、鑑賞者はかろうじて救われる◆昭和30年代、島には元患者ら数百人が暮らした。「これほどの苦しみを知らずにいた自分は罪を犯した人間と同じです」。作品への思いを絞り出した田島さんの言葉は皆への問いかけでもあろう。

2019. 8. 18